◆**池田亮二　選**　　戦争俳句～「苦い滑稽」～

あと数年もすれば、戦争を体験した日本人は、ほぼいなくなります。そして「戦争俳句」というものがあったという記憶さえ消えてしまうかもしれません。七十年前までの二十世紀前半、日本は戦争漬けの日常でした。その中で、戦争を詠んだ句も多くつくられたというのに！　まずは、古い大御所の作。

行軍の喇叭の音や雲の峯　　漱石

夏草の葉ずえに血しほくろみゆく　　鴎外

なき人のむくろを隠せ春の草　　子規

漱石の句は日清戦争、鴎外、子規の句は日露戦争の情景です。両戦争とも日本が大勝し、国中湧きかえっていたのです。その中で、漱石は軍隊を日常風景の一部として淡々とのどかに詠み、鴎外、子規の句には、戦火の果の悲しい寂寞感があるようです。

当時、天皇の軍隊は常に正義であり、神武以来絶対不敗であるという神風神話のようなものが信じられていました。そして、戦さはどこか遠くで軍人がするものであり、文人たちは「紅旗征戎わがことに非ず」と傍観してもおられたのです。

しかし、昭和六年の満州事変を端緒として、日中戦争、日米・日英開戦と戦争が泥沼化してゆく中で、戦争俳句も異様な展開をしてゆきます。戦火は戦場だけでなく、すべての人にふりかかってくるのです。

ますらをはすなはち神ぞ照紅葉　　秋桜子

撃ち攘ちて敵は火焔樹の花屑と　　青邨

砲火そそぐ南京城は炉のごとし　　虚子

菊咲けり大君のへに人征きぬ　　みぐさ女

これらは戦勝を称え、戦意を高揚する句です。はじめ日本は大勝し、南京、武漢からシンガポールまで占領したのですから。日本不敗の神話に立ち、忠君愛国、米英撃滅の意気高い句が多くつくられたのです。ただし、これらの「聖戦俳句」は、敗戦後、戦争責任の追及を恐れた作者自身によって、多くは抹消さ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

れたようです。

一方、戦争の愚かしさ、非情、不条理に向き合う全く別の視点がありました。実際兵士として戦場に立ち、あるいは戦争をわが事として引受けざるをえない若い世代の怒りと苦しみの句です。

戦争が廊下の前に立ってゐた　白泉

繃帯を巻かれ巨大な兵となる　白泉

機関銃眉間ニ赤キ花ガ咲ク　三鬼

人多く死にたる丘の風と鳥　赤黄男

夕焼に遺書のつたなく死ににけり　鬼房

水あれば飲み敵あれば射ち戦死せり　六林男

射たれたりおれに見られておれの骨　六林男

めんどりよりをんどりかなしちるさくら　鷹女

描かれた兵士の姿は、明日の自分の姿でした。そして、これらは戦争遂行、戦意高揚の国策とは相容れない反戦、厭戦思想をあおるものとされ、昭和十五年、治安維持法違反として、白泉、赤黄男、三鬼を含む無季非定形の新しい表現を目指す「新興俳句」の俳人の大半が検挙され、執筆停止とされます。

そして、無残な敗戦。焼跡、闇市、戦災孤児、傷痍軍人、街娼…の風景の中から、戦後の戦争俳句が詠まれます。

俘虜の列野遊びのごと還るなり　静塔

水脈の果炎天の墓碑を置きて去る　兜太

墓地は焼跡蝉肉片のごと樹々に　兜太

遺品あり岩波文庫「阿部一族」　六林男

砲弾に耕やされたり骨いづこ　欣一

浮浪児昼寐す「なんでもいいやい知らねえやい」

草田男

俳句の本質に「滑稽」があるとしたら、戦争の愚かさ、非情な人間無視、徒労…などは、まさに「苦い滑稽」です。最早あの戦禍の影はどこにも見られず、

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

戦争俳句が詠まれることもないことを良しとしながらも、これらの句を貴重な遺産として記憶したいと思います。

最後に海兵団水兵として参戦した三橋敏雄の句。

あやまちはくりかへします秋の暮

◆伊藤洋二　選　～加賀千代女の俳句より～

地にとどく願ひはやすし藤の花

日本には二百四十一種五千百十六紋の家紋があるとか。これらは〝源平藤橘〟（源氏、平氏、藤原氏、橘氏）時代に屋号として生まれたとのこと。爾後、使用について規制されず、江戸時代には羽織等の正装に入れる様になった。筆者の浪曲の口演の際には、略式の黒羽織の着流し姿で生き恥を曝している。藤の花をモチーフにした家紋入りであるが、「地についた節はむつかし藤の花」。

日はながし卯月の空もきのふけふ

一日は有限だが、割り切れない気持ちで終わり、夜が無限に続いていくように感じる時もある。苦はおおし長月の夜もきのふけふ。しかし、一日の憂い事は、人事を尽くして天命を待とう。日は短し天命を待つ夜長かな。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。